ドルドイバザール視察記

ERINA 調査研究部主任研究員
三村光弘

2018年8月12～17日、学会参加のためにキルギスのビシュケクを訪問した。滞在中、中央アジア最大の市場と言われるドルドイバザールに2回訪問する機会があった。今回は、ドルドイバザールの現状について簡単に報告する。

写真1　コンテナを積み上げて作ったバザール

（出所）筆者撮影

ドルドイバザールはビシュケク市の北東に位置し、関連施設も含めれば50ヘクタールほどに達する巨大な市場である。旧ソ連崩壊後に中国と旧ソ連圏（CIS）との中継貿易を念頭に置いたビジネスから始まったと言われる。

写真2　巨大なバザールの内部

（出所）筆者撮影

バザールは基本的に海運コンテナを2段縦に積んだものが基本となっており、そこにあらゆる消費財が展示、販売されている。製品の産地は品目によっても異なるが、軽工業製品や電機電子関係であれば、中国やトルコのものが多い感触であった。

写真3　卸売と小売が混在

（出所）筆者撮影

市場では卸売と小売が混在しており、同じ店舗が両方を取り扱うことも少なくないようであった。基本的に出来合いの商品を陳列して販売することがメインで、設備類などはあまり目にしなかった。

写真4　「カフェ・メディナ」のプロフ

（出所）筆者撮影

市場には食料品売り場の他、食堂もいくつか出店しており、筆者はこの中で日本人訪問者のブログなどから割合評判がよいとされる「カフェ・メディナ」を訪れた。写真4はプロフ（ピラフ）であるが羊肉の臭みがなく、大変おいしかった。これで150キルギスソム（約92円）である。

市場としては、小売と中国からの既製品の輸出のための中継地としての役割は今後も残っていくと考えられるが、この市場発の商品が開発されたり、キルギスに製造業を振興させたりすることにはつながらないのではないかと感じた。とはいえ、ユーラシア関税同盟に参加したキルギスの市場なので、ここからベラルーシやアルメニアまでを商圏として何ができるのかをよく考えていけば、現在とはまた異なったビジネスの展開があり得るかもしれない。